

シュルツとマルクス——「近代」の自己認識——

植村邦彦

1 本論文の問題設定と構成

本論文の目的は、第一に、これまで初期マルクスの思想的「先駆者」として一部で知られていたにとどまり、ドイツにおいてもわが国においても本格的な研究がほとんどなされてこなかった19世紀ドイツの思想家・革命運動家、ヴィルヘルム・シュルツ(1797-1860)の歴史観と社会認識とを詳しく検討し、その社会思想史的位置付けを試みることにある。さらに第二の目的は、シュルツとマルクスとの比較を通して、マルクスの思想を歴史的に相対化するための、言い換えれば、マルクスの社会思想史的位置を見直すための、新しい視点を提起することにある。

そうするにあたっての筆者の問題意識は、序章で述べているように、とりわけ次のことにある。第一に、「唯物論的歴史観」という言葉がマルクスの歴史観とイコールで結ばれるようになった19世紀末の時点で、一方からは「剽窃」という非難がマルクスに投げ掛けられ、他方からはマルクスの「先行者」を求めるといった問題関心が現れてくることはよく知られているが、しかし、「先行者」からの思想的影響を明らかにするという思想史的研究の方法そのものの意味を、今改めて問う必要があるのではないか、ということである。とりわけマルクス研究に関しては、ある人間をマルクスの「先駆者」「先行者」として評価するという場合、往々にして、その人物がマルクスより前にマルクスと同じようなことを言っているという点、つまり、その人物の思想のマルクスと共通する部分だけを評価する、という傾向があったことは否定できない。それは結局、マルクスの思想を基準にしてある人物の思想の長短をあげつらう、一種のトートロジーに陥っている、とすることができよう。それに対して、筆者が本論文で提起したのは、「時代の思想」として「唯物論的歴史観」

を考えてみる、ということである。別の言い方をすれば、いわゆる「唯物史観」の定冠詞を外して不定冠詞を付けてみることに、つまり、複数の思想家に担われたいくつかの唯物論的な歴史観の一つとして、マルクスの歴史観を相対化して見ることに、である。具体的には、シュルツをマルクスの「先行者」と位置付けて済ますのではなく、マルクスとともに「時代の思想」を担った一人ととらえ、シュルツの思想を「基準の石」として、シュルツの側からマルクスをとらえ直す、ということである。

第二の問題意識は、そのように唯物論的歴史観を「時代の思想」として把握することを試みる場合には、1815年のウィーン体制成立から1848年のドイツ3月革命にいたる、いわゆる「3月前」期ドイツの知的状況を全体としておさえることが、不可欠の前提となる、ということである。これまでわが国では、フリードリヒ・リストを中心対象とする経済学史的研究と、ヘーゲルからマルクスにいたる系譜に関する思想史的研究とは、それぞれに優れた蓄積をもちながら、お互いの問題関心を交錯させることが少ないままに並立してきた。しかし、それら同時代の思想をつなぐ「環」が改めて見出されなければならない。片方になお強力な官房学の伝統の内にあるアカデミー内国家学が益え立ち、他方では、ヘーゲル左派をはじめ、様々な民主主義や初期社会主義の諸思想の小星雲が渦巻く、といったこの知的混沌の中からこそ「時代の思想」としての唯物論的歴史観は生まれてくるのだからである。そして、シュルツとその思想こそ「失われた環」であるというのが筆者の判断であり、そのことが同時に、特にシュルツを取り上げて、マルクスの相対化のための「基準の石」にしようとした根拠でもある。結果として不十分なものに終わったことは自覚しているが、一方で、ヘーゲルやアダム・スミス等の前世代の思想との関連に頻繁に言及するとともに、他方で、リストをはじめヴィルヘルム・ロッシュャーやカール・クニースらの歴史派経済学、アウグスト・フォン・チェシコフスキ、カール・グリューン、アーノルト・ルーゲ、モーゼス・ヘスらのヘーゲル左派、さらにはシャルル・フーリエやサン・シモン派等のフランス初期社会主義との同時代的な思想的・実践的関連を明らかにすることにややくどい程に重点をおいたのは、以上のような意図に基づいている。

本論文の構成は次の通りである。

序章 時代の思想としての「唯物論的歴史観」——シュルツとその時代——

第1部 「近代」の自己認識

第1章 歴史認識の方法としての「統計学」

第2章 「もう一つの唯物論的歴史観」

第3章 「アジア的なもの」をめぐって

第4章 リストとシュルツ

第2部 社会変革の構想

第5章 アソツィアツィオンの構想

第6章 自由時間と民主制

第7章 所有の歴史理論

第8章 ヘスとシュルツ

終章 シュルツとマルクス

以上のように、本論文は序章と終章を別として全2部8章からなる。以下、その要旨を述べる。

2 第1部の要旨

第1部は、シュルツの歴史認識の方法とそれに支えられたヨーロッパ「近代」の自己認識の意味を、形成期の歴史派経済学やヘーゲル左派との比較の中で問うものである。

第1章では、シュルツの社会科学方法論の表明である1838年の論文「文化の統計学」を中心に、彼の「唯物論的歴史観」を支えるものとしての「歴史的・統計的方法」を考察する。マルクスやヘスが、ヘーゲル哲学を坩堝としてイギリス古典経済学・ドイツ古典哲学・フランス初期社会主義を融合させることによって、自らの思想を作り上げたのに対して、「統計学」という器の中で自らの歴史観と社会認識を鍛え上げたことに、シュルツの思想形成の独自性はあるのである。ドイツの「統計学」は、この時代にもなお官房学の伝統の内部に位置し、政治学ないし国家学の一補助学科として、現在の国家の状態を静態的に叙述するものであったが、シュルツのこの論文は、統計学の課題を「諸国民の生活の運動法則」「社会的状態の発展における自然法則」の把握におくことによって、統計学を動態化しようとするものであった。その際、統計学の対象を「文化」、とりわけ「物質的文化」に設定したこと、さらに

後者の内実を「生産諸力」の発展に対応する「諸国民の生活様式」として把握し、物質的生産における「労働の組織の変化が、諸国民の生活の精神的内容をも変化させる」と規定したことが、彼の歴史観を「唯物論的」と形容することを可能にしている。彼のこの統計的方法は、伝統的統計学を批判し、それを法則把握の学へと変革するという問題意識に関する限りで、ロッセーやクニースの「歴史的方法」に連なるものであり、他方、ヘーゲルの世界史の発展法則を批判的に継承するという問題意識を同時期のチェシコフスキと共有しながら、その唯物論的性格という点で著しい対照をなす。いずれにせよ、シュルツの歴史認識の方法の確立は、官房学的国家学が解体して歴史派経済学が成立していく過程に並行する、ドイツにおける社会科学の近代的転回の一局面をなすものであった。

第2章では、シュルツの主著である1843年の『生産の運動』を分析する。この書は序論と三つの章からなり、人類史の基礎をなすものとしての物質的生産の歴史的發展(第1章)、それに規定される精神的生産、すなわち、人類史の始源から現代にいたるまでの言語・宗教・科学の形成発展(第2章)、現代ヨーロッパ諸国の精神的状況の比較分析(第3章)、を主題としているが、ここでのシュルツのねらいは、歴史の経済的・社会的発展の法則が存在することを明らかにし、その法則と矛盾する現在の社会状態ならびに社会に関する諸理論を批判し、新しい社会諸関係の組織化のための理論的基礎付けを与えることにあった。彼は、現在の社会状態を、資本家と労働者との間の「自然に反する」所有の分配と、それに基づく階級対立の激化の状態と見る。このような状態に直面して、一方には、それを自由競争から説明し正当化しようとする国民経済学が、他方には、その変革を求める「粗野な共産主義」やヘーゲル左派の「行為の哲学」が対峙しているが、シュルツはこれらすべての理論を批判する。それらが、人間の歴史を、物質的かつ精神的な生産と享受の全体性において把握していないからである。それに対してシュルツは、人類史の発展の基礎過程を、生産と欲求との相互制約的發展によって規定される、外的自然からの人間の自立の過程として把握した。この基礎過程は、「労働有機体」の在り方、すなわち、社会的分業と労働様式(生産的人間諸力と自然諸力との結合様式)との在り方に規定される「特定の生産様式」を形作り、諸国民の「社会的形成態」はそれを経済的内容として具体化される。

シュルツはこの分業と生産諸力の発展を基準として、世界史を、手労働(ポリネ

シアやアメリカの原住民, アフリカの黒人諸民族, 中央アジアの遊牧民), 手工業(古代エジプト, オリエントの諸都府, アジアの諸帝国, ギリシア, ローマ, 中世ゲルマン), マニファクチュア, 機械制, の四つの段階に区分する。そして, 第三段階から第四段階への移行期たる現代こそ, 本質的にヨーロッパ諸国民にのみ属するものであった。これは, 過去および現在の様々な諸民族の社会的諸関係を典型的に把握したうえで, それら諸類型をヨーロッパ「近代」を基準点ないし到達点として時間軸上に配列し, 論理的に再構成した「横倒しにされた世界史」であり, したがって, シュルツにとって世界史の発展段階とは, ヘーゲルやマルクスにとってと同様, ヨーロッパ「近代」の自己認識のための理念であり概念装置だったのである。

第3章では, ヨーロッパ「近代」を基準点・到達点とする自己認識の試みとしての「世界史」が, 「西欧中心主義」と同義であるかどうかという問題を, 1845年の論文「アジア」「エジプト」, 1848年の論文「中国」に見られるシュルツの「アジア」観を手掛かりにして考察する。進歩的ヨーロッパにアジアの「停滞性」と「専制」とを対置することによって, ヨーロッパ人のアジア支配を正当化する根拠を提供したのは, ヘーゲルの『歴史哲学』であったが, このような「アジア」観は, ヘーゲル派(例えばルーテンベルクの「中臣」論)だけでなく国民経済学者リストにも共有されており, 後者はアジアの停滞性と専制を, ヨーロッパ資本の植民地主義的進出の必然性を正当化するための根拠とした。シュルツもまた, ルーテンベルクやリスト以上に「アジア的専制国家」観念にとらわれているが, 彼の場合には, それはむしろドイツの政治的現状批判のための反面教師的鏡であって, 植民地支配の正当化のための論理にはなっていない。さらに, シュルツは「停滞性」をアジアの宿命とは見ず, アジアの側からの対応としての革命を通しての近代化という展望を描いているが, このような認識はヘーゲル派にもリストにも欠落している。シュルツにあっては, 「西欧」内部でのイギリス・フランスに対する「遅れ」としての「ドイツ的みじめさ」の自覚が, リストのように後発資本主義のアジア進出への欲求として現れてくるのではなく, 「内なるアジア」の克服という問題意識を促し, さらに, 理念としての「近代」と齟齬する西欧資本主義の現実そのものの変革という問題意識へとつながっていく。これが, 彼におけるヨーロッパ「近代」の批判的自己認識の独自性である。

第4章は, 「生産諸力の理論」の提唱者としてのリストの歴史認識をその全体性に

においてシュルツのそれと比較し、同時代の思想的状況の中でのそれぞれの位置を確認することで、第1部を総括しようとするものである。両者は、政治的経歴においてだけでなく、伝統的国家学・統計学の学問的体系を批判的に継承し、そこからほぼ同時期に、しかも同じ雑誌を発表手段として「生産諸力」の理論を構築していったという点でも、共通性をもつ。しかし、理論内容から見る限り、両者の距離は大きい。「生産諸力」の概念そのものがかなり異なるし（経済的国力か人類史発展の原動力か）、歴史の発展段階認識も、啓蒙主義的四段階把握を共有しながら、やはりかなり異なる（経済政策の立論根拠か発展法則の確証か）。したがって、時論的主張もまた大きく異なる（工業化か社会変革か）。これらの違いこそ、両者のヨーロッパ「近代」認識の違いを意味する。しかしそれは、彼らがドイツの「旧体制＝前近代」に対して共同で闘争することを妨げるものではなかった。

3 第2部の要旨

第2部は、シュルツがその歴史観に基づいて、歴史的必然性の名において正当化しようとした社会変革の構想を、フランスとドイツの初期社会主義の思想史の中に位置付けながら、明らかにしようとするものである。

第5章では、1832年の著書『国民代表制によるドイツの統一』から、1837年の論文「フーリエの社会理論」、1838年の論文「文化の統計学」および「アソツィアツィオーネン」を経て、1843年の『生産の運動』にいたる、シュルツの「アソツィアツィオン」概念の変化をたどりながら、それが社会変革の構想として具体化されていく過程が明らかにされる。社会変革の構想を示すものとしての「アソシアシオン」という語は、フランスでフーリエがいち早く用いたものであるが、その後、1820年代末にサン・シモン派によって広く普及するとともに、1830年代には「ソシアリズム」という言葉と密接に結び付けられ、初期社会主義の中心的理念という位置を占める言葉となっていた。シュルツは、ドイツで最も早くこの理念に共鳴した思想家であり、1832年にはすでに、「アソツィアツィオンの原理」に従った農業生産協同組合の構想を提起し、1838年には、オウエン、サン・シモン、フーリエの3人の思想をドイツで初めて一括して比較しながら論じ、「最良の生産諸力」を保障する労働者の自発的協同組織としての「アソツィアツィオン」という概念を自己のものとしていく。そして『生産の運動』において初めて、資本家的搾取のただ中で、工場に

おいて成立する工場労働者の利害と労働との共同性を物質的基盤として「労働者のアソツィアツィオン」が準備されることを、「生産の運動の不変の法則」に規定された「有機的必然的な過程」として論じるにいたるのである。

第6章では、シュルツにおける、農民・労働者のアソツィアツィオンを生産力的基礎とする政治体制としての「民主制」の構想を、検討する。実現されるべきドイツ国民国家の具体的形態という点に関しては、シュルツは、基本的には「単一不可分の共和国」を目標とする共和主義者＝急進的民主主義者であり、ドイツ・ジャコバン派や3月革命期の共産主義者同盟と大きな差はない。しかし、彼の独自性は、民主制の実現可能性と必然性の論証の仕方にある。シュルツは、人類史における生産諸力の発展を、生産物の量的豊かさにおいてではなく、まずもって生産に必要な「時間の節約」と「人間の力の消費の軽減」とにおいて見た。したがって、彼にとって生産諸力の発展の結果は、必要労働時間が減少し、「自由時間」が増大することなのである。現代に固有の問題は、機械制の発展が「自由時間」の飛躍的増大を技術的に可能にしているにもかかわらず、資本家の搾取の下で「時間の不公正な分配」が行われ、工場労働者が享受できるはずの自由時間が、過剰な労働時間に転化されている、ということにあった。しかし、「労働者のアソツィアツィオン」によってこの問題が解決されれば、労働者が獲得する自由時間こそが「民主制」＝労働者の政治参加の物質的基礎となるであろう、というのが、シュルツの展望である。ヨーロッパ「近代」の諸理念を集約するものとしての民主制の歴史的必然性を「唯物論的歴史観」によって論証する、というこの問題意識こそ、シュルツを同時代の他の民主主義者（例えばルーゲ）から決定的に際立たせるものであった。

第7章では、1846年の論文「共産主義」を中心に、シュルツが同時代の共産主義者の主張する「財産共同体」論に対置した、所有の歴史理論を考察する。1840年前後にフランスで形成された共産主義思想をドイツに初めて広く知らせたのは1842年のローレンツ・シュタインの著書であったが、1843年にはチューリヒで活動していたヴィルヘルム・ヴァイトリンクが逮捕されて、ドイツ人共産主義者の存在とその思想が公になり、さらに1844年6月に起きたシュレーゲンとペーメンでの労働者蜂起が、共産主義を一挙に切実な現実的存在として意識させていた。そのような状況の中で、シュルツは、共産主義者の中心理念である「財産共同体」を批判するために、所有の歴史理論の展開を試みる。彼によれば、「生活共同態」の中にあり

ながら「一つの全体たる個体」として「個体的生活」を営むことが、歴史を貫く人間本性であり、そしてその個体的生活において成立するある個人と外的自然の一定部分との内面的結合が、「個体的所有」を成立させるのである。ただしこれは、共同体から分離され個別化された私的所有を直接に意味しない、所有の本質規定であって、共同所有を排除するものではない。シュルツは、この所有の本質規定が、歴史的にどのような形態を取って現れるかを、本源の形態、東洋の形態、ギリシア・ローマの形態、ゲルマンの形態、とたどって明らかにする。それによれば、人類史の出発点に普遍的かつ支配的に見られるのは、共同体による全体所有であり、そこでは個体的所有は萌芽として存在する。この萌芽が一定の成長を経た段階で、ヨーロッパにおいては、全体所有と並んで私的所有が形成され、後者は全体所有を次第に蚕食しつつ、共同体を解体する方向に作用し、最終的には個人主義の原理と私的所有の圧倒的な支配に到達する。しかし、抽象的な個人主義の原理の支配の下で、社会の全成員の権利としての「個体的所有」が現実性を空にされていることこそが、現代の問題である。これがシュルツの、所有諸関係に即してのヨーロッパ「近代」の自己認識としての歴史像であった。したがって、時代の課題は「個体的所有の再建」にある。これを実現する手段は、「財産共同体」ではなく、「民主制」国家権力による、一方での、累進課税による所有と相続の制限、社会保障を通しての所得の再分配であり、他方での、生産協同組合という「自由なアソツィアツィオン」の形成の保障である、というのが、シュルツの社会改革の展望であった。

第8章は、1843年から1847年まで続くモーゼス・ヘスとシュルツとの論争を取り上げ、初期社会主義内部での共産主義者と「社会的」民主主義者との思想的対立点を明確にすることによって、シュルツの社会変革構想の同時代的意味を総括しようとするものである。論争そのものは、1843年にシュルツがヘスの「行為の哲学」を批判したことに始まるが、翌年には「貨幣の廃棄」をめぐる論争へと発展し、社会変革の全体構想とその手段についての両者の思想的対立をあらわにするにいたる。ヘスにとって現代の主要な問題は、「貨幣所有」に基づく「貨幣貴族制と大衆の貧困との対立」にあり、この対立を止揚するには「人間の本質の疎外」たる貨幣を廃棄することが必要であった。そして、それを可能にするのが、「有機的共同体」としての「財産共同体」である「共産主義社会」であり、そこにおいて「占有者と占有物との内面的愛着関係」としての「真の所有＝個体的所有」が再建されるのである。

それに対してシュルツは、第一に、貨幣の廃棄は、生産物交換を廃棄することによって消費欲求の多様性を否定するものにはかならず、「時間の経済」という観点からも、ヘスらの主張する中央管理機関による生産物の集中・再分配は非経済的であり、第二に、プロレタリアート自身が要求しているのは労働に応じて享受する権利としての「個体的所有」であって、貨幣の廃棄ではない、とヘスを批判した。シュルツとヘスとの対立点は、要約すれば、自由か平等か、自発的アソツィアツィオン形成か統一的共同体か、享受原理は「労働に応じて」か「必要に応じて」か、市場による交換と国家による再分配の組み合わせか中央管理機関による直接的再分配か、ということにあったと言える。そしてこの二つの原理のどちらに加担するか、あるいは対立点をどのように「止揚」するか、という問題は、その後も20世紀にいたるまで一つの思想的課題であり続けたのである。

4 終章の要旨

終章は、本論文のしめくくりとして、シュルツとマルクスとの同時代的相互関係を具体的に明らかにするとともに、両者の歴史認識と社会変革の構想の歴史的意味を考察し、とりわけシュルツの側からマルクスを見ることによって、従来のマルクス像の再検討に資する一つの視点を提供しようとするものである。

周知のように、マルクスは1844年の『経済学・哲学草稿』において『生産の運動』から多くの引用を行い、その「唯物論的歴史観」から大きな影響を受けたが、それだけでなく、ここではすでに「アソツィアツィオン」による「個体的所有の再建」論にも関心を示している。『哲学の貧困』で明確にされた、資本家的大工業が労働者のアソツィアツィオンを必然化するという展望も、シュルツと共通するものである。さらにマルクスは、相対的剰余価値論の確立過程で、1863年に改めて『生産の運動』を読み直し、シュルツの生産様式の発展段階論および生産諸力発展の人類史的意味付けを再確認している。したがって、マルクスがシュルツに負うものは大きいと言えるであろう。他方シュルツはマルクスを、基本的にはヘスと同様なヘーゲル派的な抽象的論理（例えば類的存在論）を弄ぶ共産主義的空論家の一人と見なしながらも、『聖家族』におけるパウアー派の思弁的構成に対するマルクスの批判を高く評価し、また社会的弊害の具体的把握と実践的提案という、ヘスの共産主義を超える「本来の社会主義」的な側面を評価している。

この「唯物論的歴史観」に関するシュルツとマルクスの共通性は、その限界にも及ぶ。すなわち、ヨーロッパ「近代」のみを世界史的到達点＝世界史的現在とみなす、認識における「西欧中心主義」という問題である。この点では、マルクスは1853年のインド論から1881年のロシア論にいたるまで、シュルツ以上に大きな振幅を示している。しかし重要なのは、「近代」認識の限定性を批判することよりむしろ、その限定性ゆえに生み出された新しい社会形成の展望そのものの歴史的妥当性を問うことであろう。「アソツィアツィオン」による「個体的所有の再建」の歴史的必然性という展望こそ、シュルツとマルクスが共通に切り開いたものであった。しかし、シュルツが、個体的な私的小所有が現に存在することを前提したうえで、あくまで自発的なアソツィアツィオン形成を重視し、存続しうる限りにおいて私的小所有を保護すべきものとしたのに対して、他方のマルクスは、資本家の生産が個体的な私的小所有を否定しつくすことを前提し、そのうえで、自由な連合した労働者による協同組合的生産に対応する領有様式として個体的所有が再建されることを、自然史的必然と見た。このような違いが生じたのは、一つには、両者が依拠した現実が時代的・空間的に異なるからであるが、より重要なのは、両者の歴史的展望の時間的幅が大きく異なるということである。そして、その後の現実の歴史が明らかにしたことは、マルクスのだけでなくシュルツの展望でさえ、なお歴史的選択の問題としての意味を失ってはいない、ということであろう。

〔博士論文審査要旨〕

論文題目 シュルツとマルクス——「近代」の自己認識

論文審査担当者	津	田	内	匠
	富	沢	賢	治
	平	子	友	長

1 本論文の要旨

植村邦彦氏による学位請求論文「シュルツとマルクス—『近代』の自己認識」（全文 302 ページよりなる。1990 年に新評論社より刊行）は、内外における初めての本格的なシュルツ Wilhelm Friedrich Schulz (1797-1860) 研究であり、その学術的意義はきわめて大きい。

本論文の目次を以下に掲げる。

序章 時代の思想としての「唯物論的歴史観」—シュルツとその時代

第1部 「近代」の自己認識

第1章 歴史認識の方法としての「統計学」

- 1 「統計学」のドイツ的系譜
- 2 シュルツの統計学の歴史的位位置
- 3 歴史・統計・政治
- 4 生産諸力の統計学
- 5 チェシコフスキとシュルツ

第2章 「もう1つの唯物論的歴史観」

- 1 『生産の運動』の問題意識
- 2 分業と生産諸力の歴史哲学
- 3 「横倒しにされた世界史」
- 4 資本主義の「社会的弊害」

5 グリューンとシュルツ

第3章 「アジア的なるもの」をめぐる

- 1 「3月前」期における「アジア」
- 2 リストにおける「アジア的停滞性」と植民
- 3 「アジアの専制国家」批判
- 4 アジアの「近代化」とドイツ革命
- 5 「近代」の自己認識と「アジア」

第4章 リストとシュルツ

- 1 二人の「デモクラート」
- 2 「生産諸力」概念
- 3 歴史の発展段階論
- 4 時論としての社会認識

第2部 社会変革の構想

第5章 アソツィアツィオンの構想

- 1 「アソシアシオン」から「アソツィアツィオン」へ
- 2 オウエン、サン・シモン、フーリエの批判と評価
- 3 労働者の自発的協同組織としての「アソツィアツィオーネン」
- 4 「労働者のアソツィアツィオン」か「共産主義」か

第6章 自由時間と民主制

- 1 1830年代の「民主制」構想
- 2 「自由時間」と民主制
- 3 国民経済学の時間論
- 4 ルーゲとシュルツ

第7章 所有の歴史理論

- 1 「共産主義」批判と所有論
- 2 人間本性と「個体的所有」
- 3 所有の歴史的諸形態
- 4 「自由なアソツィアツィオン」と個体的所有の再健

第8章 ヘスとシュルツ

- 1 「貨幣の廃棄」をめぐる論争

- 2 ヘスにおける貨幣
- 3 シュルツにおける貨幣
- 4 論争の終結とその意味

終章 シュルツとマルクス

- 1 マルクスにとってのシュルツ (1)
- 2 シュルツにとってのマルクス
- 3 マルクスにとってのシュルツ (2)
- 4 「近代」の自己認識と社会変革の構想

(1)

シュルツは、1797年ヘッセンのダルムシュタットに生まれた。彼は、1815年ギーゼン大学に入学後まもなくブルシェンシャフト運動に参加して以降、1848年3月革命によって誕生したフランクフルト国民議会の最左派の議員としての活動に至るまで、一貫してドイツの国民的統一と民主主義的共和制の実現を要求したラディカルな政治的民主主義者であった。そのため彼は、1834年以降（3月革命後フランクフルト国民議会の議員として活動した一時期を除いて）、スイスでの亡命生活を余儀なくされ、またフランクフルト国民議会解散後は再びスイスに亡命、1860年の死に至るまで故国の地を踏むことはなかった。

政治的民主主義者としてのこうした活動のかたわら、シュルツは、1832年から1848年に至るまで、統計学者、地理学者、経済学者、歴史学者としての多彩な文筆活動を展開した。植村氏の研究は、シュルツのこうした学問的業績の意義を、フランス7月革命（1830年）からドイツ3月革命（1848年）までの時期（いわゆる「3月前期 Vormärz」）のドイツの社会思想史的状況とかがわらせて説得的に解明している。植村氏は「忘れられた」思想家シュルツの先駆的役割を「救い出す」とともに、シュルツと彼の同時代的知識人との知的交流の描写を通して、ドイツの「3月前期」に活動した体制批判的知識人たちに共通する思想構造を——すなわち「3月前期」の思想状況——を解明している。

著者の指摘するところによれば、「3月前期」の思想状況とは、近代的国民国家の形成と産業革命の進展という世界史の大道から取り残されたドイツの後進性（いわゆる「ドイツのみじめさ」）に対する痛切な自覚とドイツの近代化に対する激しい渴望であった。イギリスとフランスに対する遅れを克服するために、歴史の針を極限

状態に加速前進させねばならないという実践的志向が生まれた。こうして一方では、啓蒙主義的進歩史観（普遍的人類が主体となって政治的及び精神的自由と物質的生産力を発展、普及してゆくことが「自然法則」として歴史的必然であるという考え方）がイギリス、フランス本国より以上に増幅されて受容される地盤が形成された。

他方では、近代化を達成する時計の針を加速させようとする志向は、しばしば近代そのものさえ乗り越えて人類の究極的解放を構想する各種のユートピア理論を生み出した。ここに、近代化のための理論が近代批判（＝近代の克服）のための理論と渾然一体となって成立するという独特な思想状況が醸成される根拠があった。同一の思想家の内部で、近代の擁護と近代の批判とがアンビヴァレントに絡み合い、その時々時代の状況の変化に応じてその力点が前者に傾いたり、後者に傾いたりした。理念的に表現すれば、この近代の批判を、人間の自由、平等、幸福という西欧近代の約束した理念を資本主義的近代が不十分にしか実現していない—未完の近代—と考える者たち（シュルツもその一人である）は、啓蒙主義的近代主義の立場から近代の理念の完遂として社会主義を構想するに至った。他方、そもそも近代の実現形態が資本主義であるときみなす者たちは、近代のトータルな否定（私有財産及び貨幣の廃止）として未来社会を構想する共産主義者（ヴァイトリング、ヘスなど）となった。こうして、一方では、歴史の進行速度をどの程度「過大」評価するかをめぐって、他方では、歴史の進むべき未来のベクトルをどちらに設定するか（単純化していえば近代化の徹底、充実か、近代の否定か）をめぐって、様々な社会変革構想が星雲状態をなしていた。これが「3月前期」のドイツの体制批判的知識人の思想状況であった。

こうした思想状況の中でシュルツの果たした先駆的役割はきわめて大きい。

第一に、シュルツは、独自の生産力論の立場から、リストとともにドイツにおける国民経済学の形成に寄与し、「国状的統計学」から歴史派経済学への転換を準備した理論家であった。

第二に、シュルツは、生産様式を主内容とする生産諸力の発展こそが、上部構造を含め歴史の変動を規定する究極の動因であるとする「唯物史観」の定礎者であった。

第三に、1830年代にフランスで本格的に形成され始めたアソシアシオン論をいち早くドイツに紹介した彼は、未来の社会変革構想として自由時間、政治的民主制、

労働者のアソツィアツィオンを中心的理念とする社会主義論の定礎者であった。
(2)

シュルツは、1819年以降、アッヘンヴァル Gottfried Achenwall (1719-1772) とシュレーツァー August Ludwing von Schlözer (1735-1809) らによって形成されたいわゆるゲッティンゲン学派の統計学を研究し、1831年エアランゲン大学に学位論文「統計学と政治学の今日の関係」を提出、学位を授与されている。

当時のドイツの統計学は、今日の数学的統計学ではなく、Status (ラテン語の Status は元来、「状態」を意味していたが、近世以降「国家」をも意味するようになった) に関する学 (Statistik の原義は「Statusに関する学」であった) として「国状学」ないし「国勢学」とでも言うべきものであった。それは、世界の国々の政治的、軍事的、経済的、財政的状态を詳細に調べ上げ、各国の現時点における国力の比較を可能にすることによって、国家の政策決定のための基礎的情報を提供しようとするものであった。

シュルツは、1837年に着手した論文「文化の統計学」(Die Statisik der Kultur) において、本質的に静態的な国勢比較の学であった当時の統計学を根本的に刷新する構想を打ち出した。それは、統計学に生産諸力の時系列的発展という動態的視点を導入することによって、統計学を動態的経済学へと転換させるものであった。さらにまた、生産諸力の展開する場を「国家 Status」から一挙に人類全体に拡大し、過去から現在に至るまで地球上に出現したあらゆる生産形態を生産諸力の発展の諸段階として時系列的に整序するとともに、新しい「文化の統計学」の課題を、人類史において生産諸力の段階的発展を貫いて作用する「自然法則」の解明に求めた。シュルツはなお自らの方法を「統計学」の枠内における革新とみなしていたが、それは、本質的にはドイツにおける新しい社会科学の誕生とも言うべき達成であった。

こうして、ドイツ国民経済学の父と呼ばれるリスト Friedrich List (1789-1846) とほぼ時を同じくして、シュルツもまた、イギリス古典派経済学の経済発展理論をドイツに導入、定着させ、生産力論の立場からドイツの近代化を構想する国民経済学の形成に寄与したのである。

さらに、諸民族の興亡を貫いて作用する歴史法則の発見がドイツ歴史派経済学の基本的課題であったとすれば、シュルツの「文化の統計学」は伝統的統計学から歴史派経済学への転換をなすものであった。

要約すれば、「文化の統計学」は、地球上に存在するあらゆる民族の生産様式を類型化し、さらにそれらを発展段階として時系列的に配列し直すことによって、人類史を貫いて作用する生産諸力の発展法則を確証しようとする研究の方法であるとともに、世界史の体系的記述を可能にする叙述の方法でもあった。さらに、この方法は、シュルツにとっては、大工業による生産力の豊饒な発展とそれの資本主義的形態における貧困の蓄積との矛盾——生産力と生産関係の矛盾——を剔抉する現状批判の方法であるとともに、生産諸力の発展法則のベクトルを未来に延長することによって、アソツィアツィオン型の労働組織の合法的可能性を論証する未来社会の予見のための方法でもあった。

シュルツは、1837年から1848年にかけて、『国家辞典 Staatslexikon』の初版及び第2版のために地誌学に関する21の項目論文を執筆した。その項目は、「アフリカ」、「アジア」、「オーストラリア」、「ヨーロッパ」、「エジプト」、「中国」などであった。それらは、「文化の統計学」における歴史認識の方法の具体化であるとともに、この方法の学問的有効性を具体的事例に即して検証する試みでもあった。

(3)

シュルツは、生産諸力の発展を基軸とする人類史の発展法則の探求をさらに深化させ、1843年に刊行され、同時に彼の主著ともなった『生産の運動』において一つの唯物論的歴史観を展開した。マルクスの名によって有名となった「唯物史観」は、実はシュルツのこの著作とともに誕生したのである。

シュルツは、人類史の発展の最も基礎的な過程を、生産と欲求の相互制約的発展——欲求が生産を促し、生産物による欲求の充足が、さらに新しい欲求を生みだす——によって可能となる人間の外的自然からの自立過程と把握した。更に、彼は、この基礎過程を歴史上のあらゆる民族の「社会形成態 *soziale Gestaltungen*」の歴史の変遷を説明しうる歴史理論として具体化する媒介項として「労働有機体 *der Organismus der Arbeit*」を見出した。

この「労働有機体」の発展は、(1) 社会的分業及び(2) 技術学的意味における生産様式——シュルツはこれを「労働の組織的運用」とよんだ——という二契機から考察される。

(1) 社会的分業の発展は、(イ) 経済過程の内部における農—工—商—の順次的分立=水平的分業の発展であるとともに、(ロ) 物質的生产からの精神的生産の分

離、その結果としての社会の身分ないし階段への区分＝垂直的分業の発展でもある。アダム・スミスの分業論が下敷となっている。

(2) 生産様式＝「労働の組織的運用」は、本質的に(イ)「生産的人間諸力 productive Menschenkräfte」と(ロ)生産に役立つ「知性を持たない自然諸力 verstandeslose Naturkräfte」との結合並びに相互作用として把握され、更に(ハ)労働組織を含む。シュルツは、生産様式の発展を、(イ)労働者の主体的能力、(ロ)生産手段、(ハ)労働の組織的編成のあり方という三契様の結合において把握した。

シュルツは、「生産的人間諸力」を「人格的能力、すなわち生産の目的のために活動する人格的諸能力の総体 das persönliche Vermögen, oder der Inbegriff der zum Zweck der Produktion thätigen persönlichen Kräften」と定義している。マルクスが『資本論』において労働力を次のように定義したとき、彼はシュルツの定義を下敷としていた。

「われわれが労働力または労働能力 Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen というのは、人間の肉体すなわち生きている人格のうち存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するときにその都度運動させる、肉体的及び精神的諸能力の総体 der Inbegriff der physischen und geistigen Fähigkeiten のことである」(Marx, Das Kapital. Erster Band Werke, Bd. 23. S. 181).

以上のような内容を持つ「労働有機体」概念を用いて、シュルツは、人類の経済的発展を(1)手労働 Handarbeit の時代、(2)手工業 Handwerk の時代、(3)マニュファクチュア(高度に分化された手工業)の時代、(4)機械制 Maschinenwesen の時代の4段階に分類する。

以上の4段階区分において、中心的契機をなすものは労働手段の発展であった。

「何ができるかではなく、どの様にして、どんな労働手段でできるかが、様々な経済的時代を区別する。労働手段は、人間の労働力の発達の見度器であるだけでなく、労働がその中で行なわれる社会的諸関係の表示器でもある」(Marx, *ibid.*, S. 195)

『資本論』におけるマルクスの上記の主張の源泉の一つは、シュルツにあった。

さらに彼は、物質的生産が、国家、法、宗教、芸術などの精神的生産を規定すること、精神的生産もまた物質的生産と同一の一般的発展法則に従うことを主張し、物質的生産の発展の4段階に対応して、精神的生産も4段階に区分している。

シュルツの業績として強調しなければならぬことは、彼が、この唯物史観の方法を、資本主義経済における生産力と生産関係の矛盾として把握することによって、資本主義批判の方法にまで具体化したことであった。

機械制段階の生産力は、(1) 人類全体にとって、労働時間の短縮と自由時間の増大の可能性を与えるものであるとともに、(2) 社会的分業の再統合の技術的可能性を与え、マニファクチュア段階に支配的であった固定的分業の止揚の可能性を与えるものであった。

しかるに、機械制の資本主義的形態の下においては、(3) 機械制の導入が生産的労働者の労働を軽減するどころか、かえって強化し、労働者の生活を富裕にするどころか、かえって貧困にしていること、(4) 分業を止揚する可能性を切り開くはずの機械制の導入が、人間労働の機械化と精神的肉体的疲弊をもたらし、マニファクチュア的分業を悪しき形で再生産していることを、資本主義的生産様式における生産力と生産関係の矛盾として把握した。

シュルツは、(3) の社会的弊害を除去するために、物質的富及び自由時間の公正な分配の克服——平等な分配——を要求し、(4) の人間労働の機械化を克服するために、「労働者のアソツィアツィオン」(機械制の生産力の本質的可能性を実現させる新しい労働組織)を提唱した。これらの主張が、シュルツの構想する未来社会としての社会主義の基本的内容をなすものであった。

『経哲草稿』から『ドイツ・イデオロギー』に至る時期(1844年4月頃から1846年夏頃)、当時26歳—28歳であったマルクスが、青年ヘーゲル派の哲学的急進主義と袂をわかって、今日、唯物史観と言われる方法を模索していた時、圧倒的な説得力を持ってそのモデルを提供したものがシュルツの『生産の運動』であった。マルクスに対するシュルツの影響は、マルクスがシュルツの名を挙げていない箇所——従って、従来マルクスの独創によるものと即断されていた箇所——においてより深刻に看取される。それは、『経哲草稿』および『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクスの唯物史観の理論構成の基幹部分がシュルツに負うものだからである。

ここから、シュルツをマルクスの「先行者」として再評価しようとする研究が登場してくることは容易に予測されることであるが、植村氏は、本研究において、マルクスの唯物史観を決定版とみなし、それと近似する先行理論を単にマルクスに至る「先行者」としてのみ把握する社会思想史研究のあり方そのものを根本的に反省

する必要性を強調している。唯物史観とは、18世紀スコットランド啓蒙に始まる文明化史観を出発点とし、特殊には、それをドイツに移入定着させる過程で成立した生産諸力の発展を基軸とする歴史認識の方法である。それは様々なヴァリエントを伴いながら「3月前期」に生産力論の立場からドイツの近代化を構想した複数の知識人によって担われた1つの時代思想であり、植村氏の研究は、マルクスの唯物史観をもそのような時代思想の一つとして相対化しようとする試みであった。

植村氏は、このように唯物史観の定礎者としてのシュルツの業績を高く評価する一方で、シュルツの限界を指摘することも忘れていない。

それは、シュルツが、資本主義的生産様式における生産力と生産関係の矛盾に由来する社会的弊害を洞察することまではできたとしても、このような矛盾がいかなる内在的メカニズムによって必然的に生じてくるのかという論理——マルクスの用語を用いれば「近代市民社会の解剖学」——を提示することができなかったという点にある。このことは同時に、シュルツが、近代市民社会における経済システムの内在的分析を通じて、資本主義の変革＝社会主義の実現の必然性を基礎付けてゆく方法を持ちえなかったことを意味する。その限りでは、シュルツの社会主義論は、そこに至る道筋を欠いた一個のユートピアたらざるをえなかった。シュルツの限界もまた、シュルツの方法が、包括的な唯物史観の提示にとどまったことにあった。

植村氏の研究は、こうした回り道を経て、「3月前期」の時代思想であった唯物史観が、約20年後にマルクスの『資本論』（初版、1867年）という形で初めて「近代市民社会の解剖学」を持ち得たことがいかに重要な思想史的事件であったかということ、シュルツの限界の認識を通じて描き出している。

(4)

「3月前期」の思想家シュルツの貢献として第三に挙げるべきことは、ほぼ、同時進行的にフランスに形成されつつあった「アソシアシオン」論及び社会主義論を最初にドイツ思想界に紹介し、自らもまた、ドイツ初期社会主義の一人として「アソツィアツィオン」、民主制、自由時間の増大を主内容とする社会主義論を展開したことである。

著者によれば、「アソシアシオン association」という用語は、フーリエが『四運動の理論』（1808年）の中で、「農業アソシアシオン l'association agricole」を提唱したことによって、初めて、登場した概念であった。しかしこの言葉は、サン・シモ

ンの弟子たち（アンファンタン、バザールを中心とする）によって取り上げられ、普及されることになった。彼らは、利己主義と競争の原理に対置される人間の統一と調和の究極的な組織として「普遍的アソシアシオン l'association universelle」を構想した。この概念は 1832 年以降、「社会主義 socialisme」と結合され、初期社会主義の中心的理念の位置を占めるようになった。

シュルツは、スランスで「アソシアシオン」概念が形成され始めていた時点（1832 年）ですでに、『国民代表制によるドイツ統一』において「アソツィアツィオンの原理」に基づく農業生産協同組合の構想を提起した。

彼は 1837 年に、『国家辞典』の項目論文として執筆した「フーリエの社会理論——オヴエン及びサン・シモン主義者たちの学説との比較」は、後にユートピア的社会主義者として一括される 3 人の思想家の学説を比較検討したドイツにおける最初の論文であった。

翌 1838 年には、『現代事典』の項目論文「アソツィアツィオーネン」を執筆し、そこで「アソツィアツィオン」を次のように規定した。すなわち「アソツィアツィオン」とは、「現在の労働組織」すなわち資本主義的企業にみられる生産諸力の結合を前提としつつ、労働者の自発性にも基づいて形成され、その中で労働に比例する分配が保証されるような「協同の精神」に則った新しい労働組織のことであった。

既述のように、彼は、1843 年の『生産の運動』において、このような「アソツィアツィオン」の必然性を生産諸力の広範な結合と自由時間の増大を可能にする機械制段階の生産諸力の本質のうちに求め、他方で、資本主義的生産関係が機械制的生産諸力の発展と鋭く矛盾していることを示すことによって、資本主義的生産関係の過渡的性格を解明している。

植村氏は、シュルツの理論の意義を以上の 3 点におさえ、各論点にわたって詳細な検討を加えた後、シュルツとマルクスの関係を考察している。その際、一方では、シュルツのマルクスに対する影響が、マルクスがシュルツの名を挙げている箇所に限定されず、より広範囲にわたっていることに十分注意しつつ、他方では、シュルツの側からマルクスはどの様に評価されるかという全く新しい観点を導入することによって、マルクス研究そのものに大きな反省を迫るものとなっている。

シュルツとマルクスの基本的な見解の相違は、私的所有と貨幣に対する評価の違

いにあった。シュルツは、資本制の下における労働者の搾取、富の蓄積と貧困のそれと同時に進行を告発し、労働者のアソツィアツィオンの構想を提起したが、私的所有及び貨幣はむしろ労働者の個体的所有を保証するものとして擁護する立場をとった。シュルツは、この立場から私的所有及び貨幣を廃止して「財産共同体」を要求する共産主義者たち（かれはヴァイトリング、ヘスらを直接に念頭に置いていた）を激しく批判した。マルクスは、シュルツの共産主義批判の論理を受容した上で、しかし人間関係の物象化及び疎外を特徴とする私的所有に対する批判を欠如させているシュルツへの批判は留保していた。マルクスの理論の独自性は、現代の機械制大工業の内部に潜在的に形成される個体的所有に基づく労働者のアソツィアツィオンの構想と、私的所有及び貨幣によってもたらされる物象化された社会からの解放を求める志向とを総合しようとした点に求められる。この2つの解放理論は、「3月前期」のドイツにおいて、シュルツとヘスの対立、社会主義の共産主義の対立として敵対しあっていた。マルクス主義の複雑な歴史を理解する鍵は、そもそもマルクスの思想が、原理的に対立しあっていた社会主義と共産主義という両思想を1つの理論に統合しようとする関心によって貫かれていたことにある。

2 本論文の意義と問題点

本論文の要旨がすでに、本論文の意義の説明になっていると思われるので、繰り返しを避ける意味でここでは基本点のみ総括的に記すことにする。

本論文の意義は、何よりも「忘れられた」思想家シュルツに関する日本で始めての本格的な研究であることにある。しかも、海外の研究者の手になるシュルツ研究が、なお、マルクスの「先行者」を発掘するという視角からの研究に留まっているという現状を考慮すれば、植村氏の研究は国際的なシュルツ研究の水準をも一段向上させたといえる。植村氏は、シュルツを「発掘」することによって、従来、リストを中心とするドイツ国民経済学の形成史に焦点をあてた研究と、ヘーゲルからヘーゲル左派を経て、マルクスに至るそれとが統一されぬまま並存していた「3月前期」の研究史の中に、両者を統一する媒介項を発見した。シュルツにおいて、スミスを初めとするイギリス古典派経済学とフランス社会主義思想とヘーゲル哲学（とりわけ歴史哲学）とが邂逅し、混沌とした星雲状態の中から、歴史派経済学と唯物史観と社会主義論とが形成されていった。その意味でドイツ「3月前期」の思想

状況のカオスは、多少の図式性を残してはいるが、シュルツを中心に置く植村氏の研究によって、初めてくっきりとした輪郭を与えられたといっても過言ではない。

本論文の問題点を以下に2点列記する。

第一に、ドイツ「3月前期」の社会思想史研究の書としてはやむを得ないことであるが、シュルツと同時代的に進行したフランスの「アソシアシオン」論及び社会主義論の形成・発展史の考察がやや手薄となっていることである。

第二に、シュルツという思想家に即した思想史研究という性格上やむを得ないことであったが、「3月前期」における知識人と民衆の関係、とりわけ当時民衆レベルでいかなる運動が展開されていたのか、またシュルツが具体的にいかなる民衆運動を念頭に置き、かつそれに呼応しようとしていたのかという問題が、ほとんど論じられていないことである。

以上挙げた2点は、審査員が今後の研究の課題として植村氏に期待するところを指摘したものである。冒頭でも指摘したように、植村氏の研究は、日本で初めての本格的なシュルツ研究であり、審査員はこれを高く評価するものである。この研究は、今後、「3月前期」のドイツ社会思想史研究にも、またマルクスに関する研究にも、少なからぬ影響を与えるであろう。

3 結語

審査員一同は、上記の評価と、5月10日の口述試験の結果に基づき、植村邦彦氏に対し、一橋大学社会学博士の学位を授与することが適当であると判断する。

1991年7月10日